









## 山梨県総合農業技術センター

# 収量影響なく肥料2割削減

## スイートコーン・ナス栽培 2作1回施肥

早出しスイートコーン（以下、コーン）と抑制ナス（以下、ナス）の二毛作では、コーン収穫からナス定植までが1～2週間程度で、その間にコーンのマルチを除去し、ナス定植の施肥、耕耘、うね立て、マルチ張りなどの作業を行わなければならない。

山梨県総合農業技術センターは、1作目収穫から2作目作付けまでの労力を省くことができる2作1回施肥に着目し、生育・収量、地温上昇抑制効果について2ヵ年にわたり調査を行った。

生育・収量の試験では、同センター内は場で、コーン品種「ゴールドラッシュ」、ナス品種「千両2号」を供試し、コーンとナス2作分の肥料をマルチ内に施用した「2作1回施肥区」、施肥基準量の肥料を作物ごとに全面全層施肥した「単作区」、施肥窒素利用率を算出するための「無窒素区」を設けた。供試肥料は、コーンの基肥・追肥に

リニア型被覆尿素、ナスの基肥に被覆複合肥料、シグモイド型被覆尿素を用いた。

2年目は「2作1回施肥区」で、ナスの追肥にナスの生育中期に溶出するシグモイド型被覆尿素を加えた「2作1回施肥区①」、被覆複合肥料だけを施用した「2作1回施肥区②」を設けた。

1年目は、ナスのうねを基準としたうね幅200cmとし、コーンは3条植えとした。2年目は、コーンの2条植えを基準としたうね幅180cmとした。試験規模は、1年目が12㎡、2年目が18㎡の2反復とした。

試験の結果、コーンは「無窒素区」以外の処理区で、2ヵ年とも出荷規格が2L以上の雌穂重を確保したが、両区に有意差は認められなかった（表）。莖葉重は、1年目では両区に有意差はなかったものの、2年目では「2作1回施肥区」で①、②ともに「単作区」より有意に多かった。窒素吸収量は、

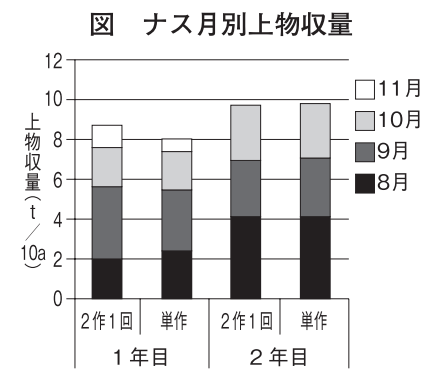
時期	試験区	施肥量	生育			窒素吸収量 kg/10a
			雌穂重	葉重	莖重	
1年目	2作1回施肥区	50	452a	154a	409b	17.6
		55	466a	159a	423b	17.9
	単作区	25	432a	154a	357a	15.0
		無窒素区	0	135	46	115
2年目	2作1回施肥区①	50	507a	198b	587b	26.8
		50	481a	179ba	476b	22.6
	単作区	25	475a	160a	403a	19.1
		無窒素区	0	164	41	104

注) 表内の異なるアルファベットは、有意差(5%水準)があることを示す。

2ヵ年とも「2作1回施肥区」が「単作区」より多かった。

ナスの収量は、2ヵ年とも両区に有意差が認められなかった（図）。窒素の吸収量は2ヵ年とも「2作1回施肥区」が「単作区」より少ない傾向だった。ナスのように、連続的に収穫する果菜類を2作目に作付ける場合、肥効を持続させるために肥料成分の溶出を調節したシグモイド型のような肥効調節型肥料の施用が求められる。

同センターは、同県の施肥基準量は窒素でコーンとナスの合計が10アール当たり65kgだが、10アール当たり50kgで「単作区」と同等の収量・品質が得られたことから、15kg削減が可能であるとしている。また、コーン収穫からナス定植までの作業時間は、1名で行った場合、合計で10アール当たり52時



間必要だが、コーン残さをハンマーモアで細断する作業の10アール当たり4時間だけでよく、10アール当たり48時間削減が可能。

活用するに当たり留意点としては、リン酸やカリは土壌分析に基づき施用し、ナスは樹勢を見ながら必要に応じて追肥する。コーンに着生していたダニが、ナスに被害を及ぼすことがあるため、ナスの初期防除が重要。

## 間欠運転でポンプなど劣化抑制

### 傾斜地のカンツキ栽培に有効

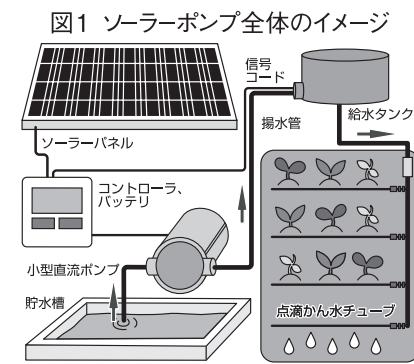
傾斜地のカンツキ園でプラスチックシートで雨を防ぎ、シートの下に点滴チューブを敷き、水やりするマルドリ方式を導入する際、水源が低い場合は点滴かん水するために高所の給水タンクに水を揚げられるポンプと電力を必要とする。

農研機構農村工学研究所は、小規模

太陽光発電と特殊な小型ポンプを組み合わせ、60m以上の揚水可能なシステムを構築し、間欠運転でコストを低減できる技術を開発した。

#### 機器の構成

同技術に用いるシステムの主な構成機器は、ソーラーパネル、充放電コントローラ、バッテリー、小型直流ポンプ



（図1）。バッテリーは、深い放電に対応するディープサイクル型鉛蓄電池、ポンプは少しの水を高く揚げられる特殊なもので、ゴムの膜で水を押し出すダイヤフラム式とする。

#### 水やりの目安

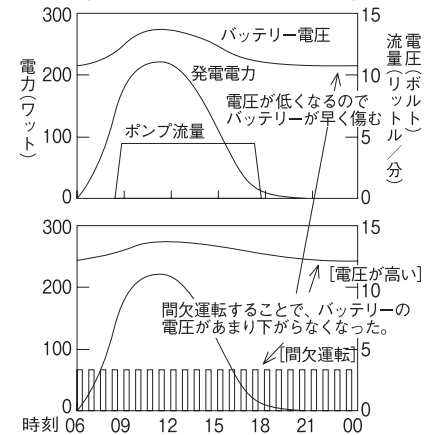
水やりの時間は、1日におよそ2～3時間。水やりしない間に、高所に置いたタンクに小型ポンプで少しずつ水を揚げておく。ポンプの大きさは、1分間に3～4L程度の水を揚げられれば十分。

標準的な性能は、かんがい面積10アール、揚水高さ60mとして、最もシステムに負荷がかかるのは4月中旬に6回、1回1950Lのかん水を行えるものとする。

#### 間欠運転

このポンプとバッテリーの寿命は長くない。タイマーを用いたポンプの間欠運転（例えば15分運転30分停止など）が、バッテリーとポンプ両方の劣化抑制に有効である。間欠運転により、ポンプの温度上昇による内部配線の損耗や、ダイヤフラムの劣化が抑制される。

図2 1日の働きの例 (上:連続運転,下:間欠運転)



バッテリーについては、日照が少なく水需要も小さい時期には、揚水を夜間に行えば、日中の電圧を十分に上昇させやすいため、長寿命化に有効。

また、連続運転ではポンプ停止時の低い電圧が翌朝まで継続し、劣化が早い。間欠運転では、24時間ポンプ稼働で曇りの日も最低電圧はあまり下がらない（図2）。

ポンプについては、連続運転では約1330時間で故障していたが、間欠運転では、約2500時間まで利用可能となり、寿命が2倍近くに伸びた。なお、間欠運転の運転・停止時間は、ポンプの能力と必要水量を勘案して決定する。

同研究所の試算によると、標準的な構成で施工費を除いた初期コストは、パイプとケーブルを150mとすると、約30万円とされる。

詳しくは、同研究所のホームページを参照のこと。

## 中生で高糖度生産が可能

### カンツキ新品種「あすみ」

1～2月に成熟する中生カンツキは、数多くの品種が育成され、普及が進んでいるが、年によっては糖度上昇が十分でない場合や酸が高い場合がある。

農研機構果樹研究所は、糖度が高く、食味が優れるとともに、剥皮可能で食べやすい施設栽培に適した中生カンツキ品種「あすみ」を育成し、14年9月に品種登録されている。

主な特徴は、樹勢は中程度、樹姿は直立性と開張性の中間であり、枝梢の長さは長く太さは中位で、発生密度は中程度。枝梢のとげの発生は多くて長い。そうか病の発生はなく、隔年結果性は中程度。

剪定の目安は、2月後半～3月、施肥は春1回、夏2回、秋2回行う。成熟期は1月下旬～2月上旬で、果汁の糖度は15%以上と極めて高く、クエン酸含量は1.0%程度となり、食味が良好である。免疫力を高める効果があるとされるβ-クリプトキサンチン含量は果肉100g当たり1.66mgと高く、ウンシュウミカンの「興津早生」と同程度含まれる。

同品種の糖度は高く、土壌および気象条件に対する適応範囲は広いいため、シートマルチによる水分ストレス処理を与えることなく、高糖度果実生産が可能。

なお、施設栽培では裂果の発生を抑制するために加温開始時期に留意し、急激な土壌水分量の変動がないよう土壌水分管理に注意する必要がある。

## 神奈川県畜産技術センター 生産性影響なくストレス減少 子豚 ほ乳期に混合飼育

離乳、分娩豚舎から離乳豚舎への移動、群の再編成などは、子豚の環境が大きく変化するため、飼養管理の重要なポイントとなる。

神奈川県畜産技術センターは、群の再編成する際に子豚のストレスを減らすため、ほ乳期の混合飼育がほ乳子豚に与える影響と離乳子豚に与える影響について麻布大学と共同で調査した。

調査は、快適性と生産性について行った。快適性は、ほ乳期や離乳期の群編成時のストレスの減少につながる項目として、外皮損傷の割合(4段階)、不快なときに見られる闘争行動などの異常行動、摂食や休息などの個体維持行動について調査し、生産性は発育や

採食量、事故率について調査した。

ほ乳期の混合飼育がほ乳子豚に与える影響の調査では、試験区2腹、対照区2腹の合計4腹を用いて、生後2日以内に隔柵を取り除き、ほ乳子豚が自由に行き来できる飼育環境で混合飼育を行う試験区、1腹ずつ隔柵した飼育環境で飼育する対照区を設けた。

調査期間は分娩豚房で飼育する1週齢～5週齢間(4週齢で離乳)とした。

試験の結果、快適性は、同腹間の子豚に対する敵対行動の発現割合は、試験区と対照区に有意差はなかった。試験区内の同腹間と異腹間では、異腹に対する敵対行動が同腹より有意に多くみられた。

外皮損傷の割合は、試験区は対照区に比べ、「損傷がなし」の割合が少なく、特に2週齢において有意差が認められた。損傷の程度は、両区とも有意差は認められなかった。

異常行動や個体維持行動は、両区の間にも有意差は認められなかった。

生産性は、1週齢から5週齢までの増体重、代用乳の摂食量に有意差は認められなかった。

吸乳行動は、多くの子豚は自身の母豚から吸乳し、自身の母豚と異なる母豚の両方を行き来し吸乳することはほとんどなかった。

また、ほ乳期の混合飼育が離乳子豚に与える影響の調査では、豚房移動・群の再編成を行った後の子豚の行動、発育等に与える影響を調べるため、ほ乳期に混合飼育を行った試験区と対照区を離乳豚舎に移動してから調査した。

試験区は混合した腹のうち1腹6～8頭ずつ14～16頭に選抜し、対照区は

単房飼育の2腹から同様に選抜・混合し離乳豚舎へ移動した。

調査期間は、離乳豚房で飼育する5週齢～8週齢とした。

試験の結果、快適性では、同腹間の子豚に対する敵対行動は、両区とも同様の発現割合が見られたものの、異腹間の子豚に対する敵対行動は、5週齢で対照区が試験区より有意に多くみられた。

外皮損傷数は、5週齢の試験区で「損傷なし」の個体が有意に多く、「1～5個の損傷あり」の割合が有意に少なかった。

生産性では、1日平均増体重、飼料摂取量、生存率に両区に有意差は認められなかった。

同センターは、ほ乳期の子豚を混合飼育することで、離乳後の群再編成時の敵対行動、外皮損傷の減少が確認されたことから、離乳子豚のストレスが減少したとしている。

## 放牧地の作業省力化 揚水ポンプで飲水供給

耕作放棄地で繁殖牛などの放牧を行うにあたり、飲水施設の整備は重要である。現地で湧き水などの水源を確保しても、放牧地より低位部にある場合、人力や動力で取水・給水しなければならない。

農研機構畜産草地研究所は、飲水を自動・省力的に供給できるシステムを開発した。

放牧地で太陽光発電型の電気牧柵システムが導入されていることから、その電源を活用し、直流ポンプなどを組み合わせることで、水源から揚水できる。

### 機器の構成

直流ポンプ、太陽光発電と充電コントローラ、ポンプの駆動や停止を制御するポンプコントローラ、飲水槽や

水源などの水位状況をポンプコントローラに伝えるフロートスイッチで構成される(図)。

### 導入手順

①ポンプはゴムの膜で水を押し出すダイアフラム式、高さ30m以上までの揚水が可能なものにする。ゴムの劣化の関係から期待寿命は2000時間とされる。清水での利用が前提とされるため、水源の水質などにより寿命が短くなる可能性があるが、1日当たり2時稼働する場合、約3年間は使用できる。100mのホースを接続した場合、揚水高5mで毎時約500L、20mでも毎時400Lの揚水が可能。

②吸水部の先端には、水の逆流によるポンプの空運転を防ぐため、逆止弁(チャッキバルブ)を取り付ける。ま

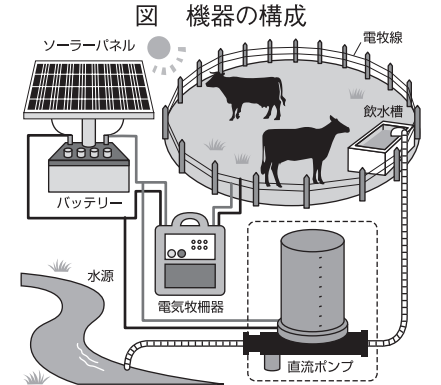
た、取り外しに便利なネジ込み式のバルブを使用すれば、雑物・土砂などが弁に詰まったりした場合の維持管理が容易になる。

③劣化防止・耐寒のために、水道用ポリエチレン二層管の使用が有効。

### 設計シートの活用

各機器の消費電力をもとに、ポンプを1日にどれだけの時間利用するかなどのデータから、必要なソーラーパネルの規模やバッテリーの容量を計算する設計シートを活用する。

導入例として、黒毛繁殖牛5頭を3つの牧区で輪換放牧する場合、ソーラ



ーパネル13Wを2枚、バッテリー36Ahを1台設ける。

詳しくは、同研究所のホームページを参照のこと。

## 人工授精 受胎率向上 新型深部注入器が有効

酪農では雌子牛を安定的に確保するため、雌選別精液の利用が進んでいる。雌選別精液や受精卵移植では、精液や受精卵を子宮の最深部へ注入すると受胎率が向上することが期待できる。しかし、一般的なシース管式注入器を使用した場合、注入器の長さが短いため、最深部への注入には経験と技術が必要とされる。

群馬県畜産試験場は、容易に精液や受精卵を深部注入できる深部注入器(モ5号)を民間会社と共同開発した。

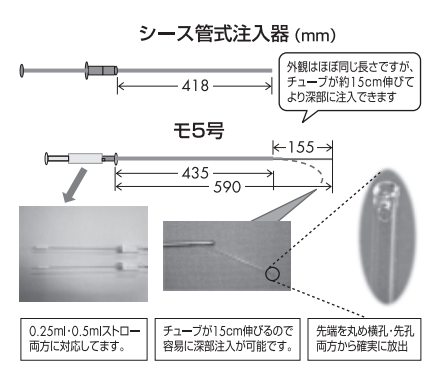
シース管式注入器は、人工授精(AI)用と受精卵移植(ET)用でストローの容積が異なるため、2種類の注入器が必要だが、モ5号はどちらのストローにも対応できる。チューブが15cm伸び押し出す方式のため、容易に子宮角最深部に注入が可能。

乳用種を受卵牛とした受精卵移植の受胎率は、例数が少なく有意差は認め

られないが、シース管式の49.5%に比べ、モ5号は76%と高くなっている。

活用に当たり留意点として、①ステップ式と同様に、注入位置からチューブを伸ばすと卵管周辺を傷つけ受胎率が低下する可能性があるため、子宮角の浅部でチューブを伸ばす②人工授精の場合、子宮角最深部に精液が注入されるため、反対角への精液の移送は起きないため、直腸検査による左右卵巣の確実な卵胞把握が必要。

同試験場は、今後、乳用経産牛に黒毛和種の雄選別精液を利用したF<sub>1</sub>雄の生産や、黒毛和種、乳用種経産牛の長期不受胎牛への利用も期待できるとしている。



## 専用長靴等着用・消毒槽設置

### 牛サルモネラ症の予防対策

サルモネラ症は、1ヵ月齢以内の子牛で症状が重く、急性では1～7日で敗血症により死亡する場合もある。成牛では発熱、下痢、泌乳量減少などの症状がみられる。

サルモネラ予防策を千葉県南部家畜保健衛生所の「牛サルモネラ症の予防対策」より紹介する。

一度発生すると、終息させるまで数ヶ月かかるため、飼養衛生管理基準を遵守し、次の予防対策をすることがもっとも効果的である。

①牛舎内で作業する時は専用の長靴・作業着を着用する②牛

舎の入口に消毒槽を設置する③ふん掃除で汚れたままの長靴でエサやりをしない④牛舎内の清掃、飼槽や水槽、カーフハッチの定期的な消毒を心掛ける。サルモネラ症が発生しても被害が大きくなるようにする⑤野生生物が牛舎内に入りにくいようにし、畜舎内にいたら駆除する⑥導入牛はすぐに牛群に混ぜず、隔離牛舎もしくは隔離牛房で3週間ほど飼養し、健康に異常がないことを確認してから牛群に混ぜる。⑦サルモネラは人へも感染するため、牛舎内作業後は手指をよく洗う。

鳥取県畜産試験場

粉砕もみ米 4割代替でオレイン酸向上

枝肉成績に遜色なく低コスト

依然として、飼料価格が高止まりにある中、近年、各地域独自でブランドを認定して、肥育牛を出荷する取り組みが増えてきている。他の生産者・産地との差別化を図るためにも地域ブランドの認定拡大の必要性が高まっている。

鳥取県畜産試験場は、黒毛和種去勢牛肥育に濃厚飼料の一部代替として、粉砕したもみ米を4割置き換えて給与すると、発育、枝肉成績などに影響なく、牛肉のうま味成分である脂肪中のオレイン酸の含有率が増える傾向があることを確認した。

飼料米給与の試験は、黒毛和種去勢牛6頭(父は、全頭「金勝忠」)を用いて、肥育開始から6ヵ月間を飼料用米に馴致させる予備飼育期間として、その後14ヵ月間を試験期間とした。通常の濃厚飼料を給与して肥育する「対照区」、粉砕したもみ米を濃厚飼料中40%混合して給与する「飼料米40%区」

の2区を設定し、比較試験を行った。調査項目は、体重・1日当たり増体重(DG)、飼料摂取量、枝肉成績など。飼料米は、少量給与からスタートし、徐々に増加させ7ヵ月以降、濃厚飼料中40%の混合割合とした。

試験の結果、体重は、試験終了時に「対照区」が平均802.7kg、「飼料米40%区」が平均814.0kgとなり、1日当たり増体量(DG)は、「対照区」「飼料米40%区」とともに0.85kg/日だった。

飼料摂取量は、1頭当たりの摂取T DN量で「対照区」が合計2927kg、「飼料米40%区」が合計3179kgと、「対照区」に比べて「飼料米40%区」がやや多かった。

枝肉成績は、「対照区」の格付が3等級、4等級、5等級それぞれ1頭ずつ、「飼料米40%区」の格付が3等級が1頭、4等級が2頭と「対照区」と差はなかった。枝肉重量の平均は、「対照区」が498.3kg、「飼料米40%区」が

494.2kgと両試験区にほとんど差はなかった。オレイン酸含有率は、「対照区」が平均54.3%、「飼料米40%区」が平均56.1%と「飼料米40%区」の方が1.8%高かった。

試験期間中の飼料費は、「対照区」が1頭当たり23万3147円、「飼料米40%区」が1頭当たり22万981円、「対照区」に比べ「飼料米40%区」が約1

万2000円安かった。

飼料用米の価格が1kg30円と濃厚飼料の4割安で、多く摂取しても全体の費用を抑えることができた。

試験の結果から、飼料米の嗜好性は良好で、給与による発育、枝肉重量、肉質への悪影響はみられず、オレイン酸含有率の向上に効果があると期待できる。粉砕もみ米の40%混合給与においては、食欲低下などアシドーシス様の症状はみられなかった。

同試験場は、飼料米は配合飼料より安価な原料ではあるが、摂取量の増加によって、飼料費低減効果は高くなく、

体重・DG

Table with 3 columns: 項目, 対照区, 飼料米40%区. Rows include 肥育開始時, DG, 試験開始時, DG, 試験終了時.

下段は標準偏差

枝肉成績

Table with 10 columns: 区分, 枝肉重量(kg), ロース面積(cm²), パラ厚(cm), 皮下脂肪厚(cm), BMS(No.), BCS(No.), BFS(No.), 枝肉格付, 心臓含有率. Rows include 対照区, 飼料米40%区, 対照区平均, 飼料米40%区平均.

コスト低減効果の高い最適な混合割合の検討が今後の課題としている。

鳥取県では、オレイン酸の含有率55%以上の牛肉を県独自ブランド「鳥取和牛オレイン55」として認定している。今回の試験成果を踏まえ、飼料米を利用して和牛を肥育することで、ブランドの認定拡大に役立つ可能性があると考えている。

今一度、口蹄疫の予防徹底を 侵入リスク高い状況続く

韓国及び日本における口蹄疫の発生状況

Table showing the occurrence status of Foot-and-mouth disease in Korea and Japan from 2000 to 2015. Includes data for Korea and Japan with specific case counts and vaccination information.

韓国では昨年7月に3年3ヵ月ぶりに口蹄疫の発生が確認されて以降、感染が拡大している。他の東アジア諸国でも発生が続いていることに加え、間もなくアジア地域における人・物の移動が一層盛んになる春節(2月19日)を迎えることもあり、日本へ口蹄疫ウイルスが侵入する可能性が極めて高い状況が続いている。今一度、発生予防の徹底が求められる。

今般、農水省が口蹄疫の発生予防として、牛・豚飼養農家向けにパンフレットを公表したので紹介する。

発生予防の徹底

①農場の出入口に看板を設置するなどにより、農場内へ不要・不急な者を立ち入らせることのないよう、関係者以外の立入を制限②農場に持ち込む物品や出入りする車両の消毒を徹底③農

場の出入口に踏込消毒槽等を設置することにより、出入りする人の靴底の消毒を徹底④従業員も含め、口蹄疫が発生している国への渡航は可能な限り控えるとともに、これら国の農場からの郵便物等は衛生管理区域に持ち込まないようにする⑤農場を出入りした人・車両等に関する情報を台帳等に記録し、少なくとも1年間は保管する。

効果的な消毒の実施

①踏込消毒槽の消毒液は、汚れて効果が薄れてしまうことから、汚れを落としてから消毒する②消毒液が汚れていることに気づいたら、直ちに交換する③農場に出入りする車両の消毒は、タイヤのみを消毒するのではなく、泥よけの内側部分や運転席の足下スペースも可能な限り消毒する。注意点としては、逆性石けんは口蹄疫の消毒液と

しては不適であること、消毒効果が弱まるので、酸性とアルカリ性の消毒薬を同時に使用しないこと。

疑わしい症状は直ちに通報を

口蹄疫は牛や豚などで発熱や食欲不

振に始まり、後によだれを流したり、口、ひづめ、乳房に水ぶくれができるのが主な特徴である。毎日必ず健康観察し、これらの症状を見つけ次第、直ちに獣医師や最寄りの家畜保健衛生所に連絡する。

家畜疾患図鑑Web公表 家患の病気を理解する一助に

農研機構動物衛生研究所は昨年11月より、法定伝染病、届出伝染病を中心に日本の畜産業にとって重要な疾病の特徴などをわかりやすく紹介する「家畜疾病図鑑Web」をホームページに公開し始めた。

各疾病のページには、短時間で読める量を目安に、疾病の特徴(①法定・届出等の別と原因、対象動物②症状、病変の特徴③伝播と疫学)と対策(①予防・治療法②その他注意事項)についてコンパクトにまとめ、写真とともに掲載している。

各疾病の情報も探しやすくなっている。同研究所ホームページのピックアップ欄にある「家畜疾病図鑑Web」をクリックするとトップページに移動する。タイトル下にある「家畜(法定)伝染病」、「届出伝染病」、「その他」をクリックすると疾病のインデックスが表示される。また、サイドメニュー(左)の目次に「対象家畜別に探す」、

「病因別に探す」、「五十音順に探す」、「掲載順に探す」を設け、それぞれのインデックスからも疾病名を探せる。疾病名をクリックすると個々の疾病についてのページが表示される。

法定伝染病と届出伝染病では「家畜伝染病予防法」の対象家畜、その他疾病については罹患する家畜を記載し、各家畜のアイコンでわかりやすく表示している。さらに疾病について詳しく知りたい場合は、ページ下方にある「参考情報」から関連する家畜監視伝染病のページへ移動できる。

同研究所は、畜産関係者をはじめとする多くの人に、「発生の予防」や「早期発見・連絡」に努め、家畜の病気や原因を正しく理解して、日頃から消毒等の衛生対策や飼養管理を適切に実施していくことを求めている。そのため、多くの人に「家畜疾病図鑑Web」を利用してもらい、家畜の病気を理解する一助になればとしている。

# 畜産物需給見通し

## 牛枝肉

各品種の出荷減  
続き、前年同月  
を上回るか

1月は、気温低下による鍋物需要が継続して消費が好調だったことや昨年12月に早出ししたことにより出荷頭数が減少したことなどから、和牛3・4等級を中心に引き続き相場は高値で推移した。

【乳去勢】1月の大阪市場乳去勢牛税込み平均枝肉単価は、B2は1031円(前年同月比124%)となった。前月に比べ37円上げた(B3は上場なし)。

農畜産業振興機構は、2月の乳用種牛(雌含む)の全国出荷頭数を2万9000頭(前年同月比96%)と見込んでいる。2月の牛肉輸入量は、3万7600t(同105%)、うち冷蔵品1万5500t(同104%)、冷凍品2万2200t(同106%)と予測している。日豪EPA発効や米国西海岸港湾の労使交渉の難航にともなう出船の遅れにより、輸入量は変動する可能性があるとしている。

【F<sub>1</sub>去勢】1月の東京市場F<sub>1</sub>去勢牛税込み平均枝肉単価は、B3が1430円(前年同月比118%)、B2は1318円(同122%)となった。前月に比べB3で2円下げ、B2で70円上げた。

農畜産業振興機構は、2月の全国出荷頭数を1万6700頭(同94%)と予測している。

【和去勢】1月の東京市場和去勢牛税込み平均枝肉単価は、A4が2295円

(前年同月比126%)、A3は2126円(同131%)となった。前月に比べそれぞれ130円、171円上げた。

農畜産業振興機構は、2月の全国出荷頭数を3万4400頭(同94%)と予測している。離農の進行などにともない、減少傾向が続いているとしている。

各品種合計の出荷頭数は、前年同月を5%下回ると予測している。

これからは、例年は消費がしだいに落ち込む時期だが、長引く円安の影響で輸入牛肉の高止まりや出荷頭数の減少傾向などによる品薄感から、引き合いは依然として強いと予想される。

前月に引き続き、各品種の出荷頭数が前年同月を下回ると予測されることから、向こう1ヵ月の相場は、乳用種でもちあい、交雑種2・3等級で強もちあい、和牛3・4等級で堅調と見込まれる。

大阪市場の乳去勢税込み平均枝肉単価は、B3が950~1000円、B2は850~900円、東京市場の税込み平均枝肉単価は、F<sub>1</sub>去勢B3が1350~1450円、B2は1200~1300円、和去勢A4が2150~2250円、A3は2000~2100円での展開か。

## 1月の子牛取引状況 (単位:頭、kg)

ブロック名	品種	頭数		重量		1頭当たり金額		単価/kg	
		当月	前月	当月	前月	当月	前月	当月	前月
北海道	乳去	606	537	273	277	164,372	157,352	602	568
	F <sub>1</sub> 去	1,366	1,219	310	306	395,585	408,795	1,276	1,336
	和去	954	1,895	304	298	620,375	624,898	2,041	2,097
東北	乳去	-	1	-	159	-	23,760	-	149
	F <sub>1</sub> 去	10	13	285	281	271,944	333,554	954	1,187
	和去	2,153	2,725	298	297	610,400	626,720	2,046	2,112
関東	乳去	20	23	232	257	85,211	113,729	367	443
	F <sub>1</sub> 去	184	228	296	293	366,184	368,494	1,239	1,260
	和去	742	964	269	268	604,327	632,466	2,247	2,359
北陸	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F <sub>1</sub> 去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	-	77	-	263	-	603,663	-	2,295
東海	乳去	29	23	298	291	155,780	161,295	523	554
	F <sub>1</sub> 去	73	89	296	301	357,465	366,762	1,207	1,220
	和去	415	249	262	260	633,519	620,262	2,418	2,386
近畿	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F <sub>1</sub> 去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	505	511	254	252	708,636	812,791	2,792	3,225
中四国	乳去	145	106	258	268	169,381	177,874	656	663
	F <sub>1</sub> 去	246	256	276	279	368,600	367,212	1,334	1,316
	和去	680	988	279	228	593,459	594,251	2,127	2,601
九州・沖縄	乳去	29	29	282	268	158,797	140,735	564	525
	F <sub>1</sub> 去	346	391	287	287	382,416	368,964	1,334	1,284
	和去	9,895	8,049	272	277	613,686	620,057	2,254	2,241
全国	乳去	829	719	271	275	162,842	158,252	601	575
	F <sub>1</sub> 去	2,225	2,196	301	298	386,316	390,522	1,283	1,310
	和去	15,344	15,458	277	281	615,953	627,243	2,224	2,232

注) (独)農畜産業振興機構の公表データを基に本紙集計、当月は暫定値。価格は消費税込み、重量・金額・単価は加重平均。-は上場がなかったことを示す。関東ブロックは山梨県、長野県、静岡県を含む。

## 南港市場 前年比2割減少 敷料管理・防寒対策に注意

牛肉の需要期が終わり、2月は閑散期ということもあり、例年であれば相場は軟調になるが、今年は年明けから高値を維持している。

一番の要因は、絶対量が少ないということだ。全国的な飼養頭数の減少や早出しの影響などもあるが、2月の上場予定頭数は前年と比べ、和牛が86%、交雑牛が78%、乳牛が20%、全体頭数が76%程度で他市場と比べても集荷が落ち込んでおり、解消の目処は立っていない。

別の要因として、円安の影響が挙げられる。輸入牛肉が高値ということもあるが、一方で外国人の観光客

が増加しており、外食産業の消費動向の好調も要因の一つと市場関係者はみている。あるステーキ店では、客の5割超が外国人という話も聞かれる。

しかし、一般的には財布のひもが固くなっており、購買者は口をそろえて末端の動きは良くないと話している。特にロイン系などの高級部位の動きは鈍く、少しでも安価な物をとということ、交雑種2等級や和牛3等級の引き合いが強い。その中でも、歩留が良く、肉量のとれそうな枝肉が好まれる。

そこで、商品価値を少しでも上げるために、寒さが厳しくなるこの時期は、特に床が汚れていると、バラが薄くなる要因になる可能性があるため、敷料管理や防寒対策に注意してほしい。

(全開連西日本支所神戸事業所 石川友也)



## 豚枝肉

需要は強くないが、出回量少なく、もちあいが

1月の東京市場税込み平均枝肉単価は、上物が523円(前年同月比120%)、中物は490円(同120%)となった。前月に比べそれぞれ140円、150円下げた。年明けに急落、月後半に上昇と変動が大きかったが、月平均は前年同月比2割高となった。

農水省食肉鶏卵課によると、全国出荷頭数を2月は131万5000頭(前年同月比98%)、3月は136万5000頭(同100%)と予測している。6ヵ月前の豚流行性下痢発生の影響は小さくなるものの、前年同月を下回ると予測している。農畜産業振興機構は、2月の輸入量

を5万4200t(同95%)、うち冷蔵品2万200t(同78%)、冷凍品3万4000t(同109%)と予測している。米国西海岸港湾の労使交渉が難航していることから、出船が大幅に遅れており、米国およびカナダ産が中心の冷蔵品の輸入量に大きく影響すると予測している。冷凍品は欧州産が約半数を占めており、冷蔵品ほどの影響はないと見込んでいる。

需要が強くない時期だが、出荷頭数および冷蔵品輸入量の減少の予測されていることから、相場はもちあいで推移すると予想される。よって、向こう1ヵ月の東京市場税込み平均枝肉単価は、上物が510~540円、中物470~500円での展開か。

## 素牛 スモール

素牛絶対量不足で相場はほぼもちあいで推移か

【乳素牛】1月の素牛価格(左表)の全国1頭当たり税込み平均価格は、乳去勢が16万2842円(前年同月比113%)、F<sub>1</sub>去勢が38万6316円(同105%)となった。前月に比べ乳去勢は4590円上げ、F<sub>1</sub>去勢は4206円下げた。素牛の出荷頭数があまり回復せず、相場は依然高値となった。

素牛不足は続くことが見込まれる中、肥育農家の導入意欲が高まることと予測される。今後は、需給がさらにひっ迫するもようであり、両品種とも相場は強もちあいが予測される。

【スモール】1月の北海道主要市場1頭当たり税込み平均価格は、乳雄が4万3691円(前年同月比102%)、F<sub>1</sub>雄が15万3065円(同84%)となった。前月に比べ乳雄は1249円上げ、F<sub>1</sub>雄は

5464円下げた。取引頭数は、乳雄、F<sub>1</sub>雄とも前月に比べ増加しており、それぞれ前月比111%、113%となった。前年同月比では91%、116%。両品種とも先月に比べ取引頭数が増加したものの、相場はもちあいで推移した。

今後は、スモール出荷頭数回復は見込めず、一部の需要に対応できないことが予想され、相場はほぼもちあいで推移するか。

【和子牛】1月の和去勢価格(左表)の全国1頭当たり税込み平均価格は、61万5953円(前年同月比109%)で、前月に比べ1万1290円下げた。素牛の絶対量不足が続いたが、肉牛出荷の需要期から外れ、価格は小幅な下げとなった。

今後は、通常であれば一段安の展開が必至だが、枝肉市況が堅調な上、素牛の絶対量不足が続くと見込まれ、下げは小幅にとどまるか。